全国各类作文比赛、演讲比赛获奖作品

しゅうさく

下册

生きているという、こんなに幸せなことは人生一度きりなので大切にしていかなくてはいけないと感じます。私も落ち込んだりすることがあるかもしれませんが、自分の夢に一歩でも近づけるよう努力したいと思います。そして私の夢にも花が咲きますように。

今日一日を十分に生き、出会った一つ一つの出来事を幸せに感じて生きることができれば、今まで見落としていたようなことが沢山の発見や感動となって、胸に刻まれていくだろう。

僕たちにはそれぞれ違う未来が待っているだろうが、弱った時には力を与え合い、また嬉しい時には喜び合ってどんな時もこの強い絆を大切にしながら、それぞれの人生を過ごしていけたら最高だ。

——摘自书中话语

主编◎刘 伟

日语优秀作文精选

南开大学出版社

日本全国各类作文比赛、演讲比赛获奖作品

下册

しゅうさく

主编：刘　伟

编者：刘　伟　刘小荣　张　华　杨朝桂　刘玉芹

日语优秀作文精选

南开大学出版社

书前赠言

通向日语作文、日语演讲的成功之路

无论书面写作，还是口头演讲，都必须有一篇让人耳目一新、动人心弦的优秀文章，才能够获得成功。

写好文章，途径当然是很多的。但是最基本、也是最重要的一条就是：勤于阅读与借鉴。这是古今中外颠扑不破的真理。

任何事情都得从借鉴模仿开始，就如同书法学习必须从临摹开始一样，想创作诗歌也得从唐诗宋词背诵开始，而非仅仅依靠诗歌创造规则的学习。

书法、写诗是这样，作文也是这样，需要参考相应范文的词语应用与构思。外语作文更是这样。从日语作文角度来说，必须从熟读、借鉴相关的日语范文做起，参考、学习、模仿、借鉴外国人作文当中的优秀之处。

由于外语水平的限制，尽管我们可能拥有独特的构思、动人的题材，但没有相应丰富的外语词语、句法来表现它，依然无法成为佳作。因此，大量参考相关的日本人创造的优秀范文，学习相关词语、句法来丰富自己，进而再创造，是我们写好日语作文的重要前提之一。即使是日语基础相对较好的同学，也要大量阅读相关的日语优秀作文，汲取其中的精华，学习其表现手法和语言。通过这种潜移默化，自己的语言在流诸笔端之际才会显得通畅流利，甚至还会冒出一些自己意想不到的闪光的语言措辞来。闭门造车是永远不能够进步的。

此外，由于两国的社会文化差异非常大，这也反映到作文中来。阅读相关的作品，了解日本人所感、所思，可以拓宽自己的视野，获取有关日本社会文化方面的知识。

无须赘言，日语作文需要从阅读和借鉴开始。那么如何去阅读、去借鉴呢？

这就是你手中的这套《**日语优秀作文精选**》(**上、下册**)。

这套精选作文，是从日本全国近几年来各类作文比赛、演讲比赛获奖作品以及在日本出版的日语作文范文图书中精选出来的，上、下两册所选范文共360篇，作者以日本的当代大、中学生为主，其作文构思新颖、表达贴切细腻，富有感染力，而且词语丰富优美，代表了日本当今最鲜活的日语。

这套精选作文，体现日本人的日语作文的最高水平。它不仅反映了当前日本大中学生的所思所想，传递了日本当代社会文化的最新信息，更重要的是为我国广大日语学习者，提供了一套丰富的日语写作资料以及日语学习资料，供我们从中品味、借鉴和仿效。探索这些作文中表现出来的独特的创造个性，可以得到写好作文的深层启示。

当然，模仿不要流于机械，一切借鉴得来的思想、观点和语言都以自然流露和运用的方式融入自己要表达的内容里，变成自己的“创作”。

本书所选文章都出自年龄心理特点与我国学生大致相同的日本大中学生之手，具有十分自然的可比性和启发性。阅读的实践证明：有比较的阅读，可以最有效地发现自己所需要吸取的东西；同龄人的习作，最容易得到立意、选材、构思和语言等方面的启发。

这套作文选的很多作文就常会令读者眼前一亮，感受到一种朴素的或者华丽的、鲜明的或者含蓄的、令人醒目的或者发人深思的语言的魅力。读到好的语段，重复两遍也可以加强印象，溶入记忆，或多或少的有所储存，最终会有益于行文的。

在这里，需要重点指出的是演讲作文，它和书面作文并无太大差别，其成功的基础同样是文章必须优秀，但是演讲又是一种特殊的形式，因此本书单独设定一个栏目来编写，希望同学能够从中了解一下它的风格。

当你在为日语作文或演讲文章而烦恼的时候，这本书一定能够助你一臂之力！

祝你的日语作文水平更上一层楼！

主编：刘　伟

2004年6月于天津大学

如何写好日语同题作文

同题作文，日语叫做“課題作文”，就是指根据一个固定题目或者一个基本主题写出相应的文章来。目前，无论是各类日语考试中的作文，还是不同类型的日语作文比赛、日语演讲比赛，其文章形式都属于这种。

虽然题目或者主题被限定下来，但是在具体选材、立意、构思等方面，作者还是有充分自由的，可以写出不同内容的文章来。

此外，面对同一个题目，由于个人的生活经历不同，也可以写出不同内容的文章来。即使是同一个人写同一个题目，如果从不同角度着眼，也可以写出不同内容的文章。

那么如何写好同题作文呢?

首先，**要从多方面进行选材**。面对同一个题目，要从不同方面进行选材，最后确定一个最佳素材。比如围绕“发生在家里的一件事”这一共同题目，有的作文写的是给家庭带来幸福和快乐的一件事，有的写的是叫人担心和烦恼的一件事，有的写的是反映家庭中两代人新型关系的一件事，有的写的是父母热心教育子女的一件事。但是无论是哪一件事，都必须首先是你自己认为最能够符合文题要求的。

其次，**所选材料要紧扣主题**。文章主题确定以后，文中一切都要围绕这一中心来运作，所述内容必须是最能够体现这一主题的材料，任何一段内容或文字都不能脱离中心思想。切忌文不对题。

第三，**构思要巧妙**。面对同一个题目，要从不同方面进行构思。比如同一题目“介绍家乡的一种特产”，有的学生写家乡的一种药材之贵，用模仿他人介绍说明实物方法构思，有的学生写家乡的一种药材之苦，用逆向思维方法构思。要想构思巧，一要多看，二要多想，想出几套构思方案，最后选定一个最佳构思。最佳构思也就是别开生面，不落俗套，想出别人不曾用过的布局手法。

第四，**立意要新颖**。同题作文，无论是写人还是记事，无论是写景还是状

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

物，立意都要新颖，有独创性，写出一点新的东西，提出一种新的思想，给读者以新的感受和启发。要写出新意，就要努力捕捉生活中的闪光点、有新意的东西。即使是凡人小事，但如果能够把它摆在社会的大背景上来写，使小事闪烁出奇异的光彩，起到强烈的社会效应，文章的立意才会有深度。而且，尽量挖掘题材丰富的内涵，提炼出自己新鲜的感受，才能使人读后耳目一新。

总之，立意要新颖，关键是要有自己独特的感受和发现。写人时，要写出这个人的精神和品质；记事时，要写出事件发展过程中所包含的思想意义；写景时，不是为写景而写景，而是倾注了自己的感情。

好了，就说这些吧，大家还是具体体会一下书中的作文是如何发挥上述要素的吧！

刘　伟

编写及使用说明

本套图书在选材上，努力做到两点：题材尽量贴近学生需求，选材尽量广泛实用，为我国学生提供大量的日语书面作文、演讲作文的优秀范文。

本套图书编排上，基本上是以文章内容为基调进行分类，而不是按照写人、记事、议论、说明等的形式进行分类。所以，同一内容的文章可能体裁不同。但是，上册的“书信范例篇”、以及下册的“演讲范例篇”，由于文章的特殊性，为了让同学有一个集中的借鉴，是以体裁而非内容为基础编排的。

在具体内容安排上：

上册文章侧重于精神世界，具体分为十二篇：

理想追求篇、未来遐想篇、生命真谛篇、人生所感篇、
幸福感悟篇、友谊情深篇、理解沟通篇、家族介绍篇、
家庭亲情篇、校园生活篇、国际交流篇、书信范例篇。

下册文章侧重于现实世界，具体分为十二篇：

自然描写篇、水江川海篇、爱护自然篇、环境卫生篇、
地球危机篇、人类和平篇、社会问题篇、纳税保险篇、
勤劳财富篇、日本文化篇、大众话题篇、演讲范例篇。

在有些篇章安排上，尽管重点不同，但是并不是完全没有联系的。例如，“理想追求篇”和“未来遐想篇”，虽然有一定的区别，但是叙述的都是将来，又有一定关联。因此，如果需要阅读相关的范文，应当尽量多读一些关联度比较高的不同标题中的文章。这样，参考的范围可能会更宽一些。

要想写好一篇文章，先阅读一些本套图书中的相关文章是非常有必要的。

本套图书，对于各类日语作文比赛、演讲作文比赛、各类日语考试作文部

分、日语专业日语写作课程、以及日语学习的提高，具有重要的实际应用价值。

本套图书主要资料是由天津大学副教授刘伟 2003 年下半年在日本学习期间负责联系、收集的。另外，本书的体例构思、章节编排等也由刘伟负责。

本书共收集范文 360 篇，具体编写分工是：

刘　伟：196 篇；刘小荣：56 篇；张　华：52 篇；

杨朝桂：　41 篇；刘玉芹：15 篇

本书在具体编写过程当中，受到天津大学青年教师基金的资助，在此深表谢意。

最后，真诚感谢为本书出版提供优秀范文的日本相关出版单位、团体机构等。正是由于中日双方的这种真诚合作，该套图书才得以问世。希望本书成为两国文化交流长河当中的一滴水，源远流长，永不干枯！

刘　伟

上册主目录

理想追求篇
未来遐想篇
生命真谛篇
人生所感篇
幸福感悟篇
友谊情深篇
理解沟通篇
家族介绍篇
家庭亲情篇
校园生活篇
国际交流篇
书信范例篇

160篇

下册主目录

自然描写篇
水江川海篇
爱护自然篇
环境卫生篇
地球危机篇
人类和平篇
社会问题篇
纳税保险篇
勤劳财富篇
日本文化篇
大众话题篇
演讲范例篇

200篇

下編目録

自然描写篇（11 篇）

1 春
2 夏の思い出
3 秋
4 花
4 私の好きな花
5 ぶどう
5 橋
7 泉
7 山との出会い
9 朝顔の魅力
11 川からのプレゼント

水江川海篇（17 篇）

15 かけがえのない水
16 水からの知らせ
18 みんなの水
20 輝く水
21 水と自然
23 水道のある生活
25 水、地球、雨の一日
26 水と生きよう
28 私たちと水
30 生命の源
31 同じ川のちがう川の流れ
33 水への思いやり
34 川
35 川や海のために
36 きれいな海に
37 海は最初のお母さん
39 海色はがき

爱护自然篇（23 篇）

43 緑
43 小さな力、大きな力
45 自然と人との関り方について
46 いつか素敵な野原に･･･
47 森はなくなった
49 里山の自然をいつまでも
50 自然へのおくりもの
51 これからの時代に必要なもの
53 自然あふれる僕らの田んぼ
54 ふじみ湖の未来
55 溜池から自然保護を
57 木の優しさを知って
58 狭山丘陵の一年間を見て
59 動物を大事にしよう
61 他の生物と共に生きよう
62 豊かな島
65 共生の原点は「循環」にある
67 命のかけ橋「森林」を救え！
68 自然界は自然のサイクルで
69 入間リバークリーンに参加して
70 小さな生命を大切に
72 動物と共に生きていく為に
73 ウミガメボランティアに参加して

环境卫生篇（10 篇）

77 私達のごみ問題
78 身近なごみ問題
79 入間市のごみ処理
80 生ごみの行方を考える
81 清掃ボランティアを通して
83 本当のゴミ

84 ゴミを拾う人
85 世界をきれいにしよう
89 身近にできるボランティア
91 清掃活動を通して学んだこと

地球危机篇（13 篇）
93 地球への思いやり
94 地球を救うために、今私たちができること
95 私の身近な環境について
96 環境を守るには
96 悲鳴をあげる地球
98 かけがえのない地球を大切に
100 地球を大切に…
101 理想——ユートピア
102 地球のために私たちに出来ること
104 病みかけている地球
106 地球を守る
108 地球の環境問題について
110 地球を守ろう

人类和平篇（13 篇）
113 平和
114 true peace
116 平和
118 戦争のない世の中に
119 平和を願って
121 「平和」という時の中で
123 平和な世の中へ
124 世界を見つめて
126 みんなで考える平和
128 平和について

下册 细目录

129 遠い眼をして
131 調和は私の世界
133 戦争と命

社会问题篇（23 篇）
137 「平等」について
138 私のペンケースから考えた事
140 男女平等について僕が思うこと
141 家庭の仕事とは
142 家族のかたち
143 男女平等と言う事
144 やっぱり，女は赤ですか？
145 本当の男女平等とは
146 本当の男女平等を求めて
148 男と女の仕事
149 本当の男女平等へ
150 真の男女平等社会
151 疑問に思う事
152 ２１世紀にバリアフリーが果たす役割
154 新しい時代の女性
156 個性が輝く社会
158 ありがとうの響き
160 みんなが支え合う社会へ
162 心のバリア
164 今の現状
166 高齢化社会と若者
167 ゆとりある生活の中で
169 天の邪鬼からの発想

纳税保险篇（9 篇）
173 税金の恩恵

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

174 税金に感謝
175 税金について考える
176 明るい社会を築く税
178 税の大切さ
180 税と私たちの未来
182 税金と私たちの生活
184 保険との出会い
185 安心させてくれた生命保険

勤劳财富篇（12 篇）
189 勤労
189 勤労というものは
190 勤労の意味
191 働くことの楽しさと義務
192 「働く」の意味
194 働くことの意味 仕事の中で…
196 働いて得るもの
198 大切に使いたい ―お金―
201 わたしの大事な千円札
202 お金を得ることの大変さ
203 お金は災いのもとか、幸いのもとか
205 私の中の貯金

日本文化篇（11 篇）
207 美しい日本語を明日に
209 伝えたい日本の伝統と文化
210 伝統文化のこれからを考える
212 京都の伝統文化
214 身近な伝統文化にふれて
216 残したい先祖の知恵
218 受け継ぐことの大切さ
220 私の日本および日本人観
221 私の日本および日本人観
221 日本の海外援助について
222 日本の豊かさについて

大众话题篇（51 篇）
225 名前
226 写真
227 鉛筆
228 鉛筆
228 さくら
229 青春
230 健康
230 感情について
231 私の性格
232 私の趣味
233 私の信条
234 私の抱負
235 私の人生観
236 私の職業観
237 私の可能性
239 私の発見
240 私のふるさと
242 心のふるさと
244 私たちの世代
245 私の尊敬する人
246 忘れえぬ人
247 一冊の本
248 私が感動した一冊の本
249 読書と人生
249 私の愛読書

下册 细目录

249 『五体不満足』を読んで
251 机にむかって
251 心
252 美醜
252 声
253 勇気
254 道
255 道
256 都会
256 受験戦争
257 出合い
258 責任
259 信念
259 自由と秩序
260 自由と規律
261 国家と私
262 悲しかったこと
263 「何かできる」と思うこと
265 近頃思うこと
266 近頃感心したこと
267 今私たちにできること
268 今私たちに出来ること
269 出来ることから始めよう
271 当社へ私を推薦する
271 社会人となるにあたっての私の心構え
272 海の歌

演讲范例篇（7 篇）

275 私が日本で学んでいること
277 ボランティアと日本人
279 日本人の付き合いを見て感じること
282 技術の進歩と幸せ
283 日本人よ、外に出ましょう
285 最も貴重な物とは
287 心に残った言葉

下册 细目录

自然描写篇

春

ある朝、起き抜けに外へ出てみると、空気はしめりけを帯びて生あたたかく、遠くの山は朝もやの中でかすんで見える。そういう自然にふれたとき、私は「ああ、春がきたのだな」と思う。そこにはもはや、灰色の冬の姿はない。まぎれもなく自然は春である。

やがて小川の水がぬるみ、つくしが芽を出し、すみれが、かわいい姿を見せる。そして小鳥たちの楽しげな歌声が聞かれ、田園を菜の花やれんげが、黄に赤に美しく色どるようになれば、春はもうたけなわといってよい。空には明るい太陽が輝き、人々はぽかぽかと暖かいその光に包まれ、和やかな気分になり、幸福感に浸る。若い人たちは、明るい色の服を着て街にあふれ、野山に遊び、春を楽しもうとする。春はうれしい季節である。

だが、春は何といっても花見であろう。そのころともなれば、花の名所は人出でにぎわい、春何番かの風が砂ぼこりを巻き上げるのも気にせず、人々は春に魅せられたように、花の下で飲み、歌い、踊るのである。夜桜の美しさはまた格別である。ぼんぼりの光に照らし出された桜の花の、なんとなまめかしく、美しいことか。空におぼろ月が出ていて、生あたたかい夜の空気が、そっと頬をなぜれば、私たちはいつしか夢見心地になる。そんなときである、行きかう女性がみな美人に見えるのは。

しかし花の盛りは、そう長くはない。風もないのに桜の花がハラハラと散り始めれば、春はもう老いたのである。大かたの花が散った枝に、赤茶けたガクだけが残っているのは、いかにも味けない。そして散った花びらは、地上の泥にまみれ、人に踏まれて無残な姿になるのであるが、人々は世事に追

われて、もはや花の運命をかえりみようとはしない。ただ春雨が、地上の花びらをいとおしむように、音もなく静かに降るのみである。春の女神の涙のように。

夏の思い出

この夏、私は東北旅行をした。松島、金華山を回り、平泉を訪れた。夏休みも終わりに近かったので、観光客の姿がまばらであったのが、かえってうれしかった。

山路へかかる。左右には樹齢何百年という太い杉の木が空高くそそり立っていた。その根元は多くは、はだけていて、歴史の古さは知られた。真夏だというのに、そこはヒヤリと冷気が快く、私は汗をかかずに坂を登った。金色堂の前に出た。音に聞く金色堂はうす暗い鉄筋コンクリートの建物の中にあり、しかもあまりに金色さん然としていて、かえって親しめなかった。その花やかさに引きかえ、中尊寺そのものは数百年の星霜に古びて目立たず、あやうく私は見落とすところであった。とかくして私は、木立の間から東北方の原野の一角が眺められる山の上に出た。見渡せば、緑の田園の間を、灰白色にかがやきつつ流れる川があった。それが衣川だと知って、私は思わず目を凝らした。

時は文治五年、ここ衣川の館はにわかに騒然となる。駆け回る武士の姿、馬のいななき、怒号、悲鳴。奥の間では「もやはこれまでと存ずる。早や早やお覚悟を」という武蔵坊の声に、主君義経はっと立って奥へ。火の手が上がる。紅蓮のほのおは、たちまち御所を包む。建物の焼け落ちる音、ドッとあがるときの声・・・。武名を一代にとどろかせた英雄の最期はあまりにも哀れであった。

今、山上に立てば衣川はやはりそこに流れているが、柳の御所は跡形もなく、見渡せば緑の田園が広々とつづくだけ。武蔵坊弁慶や、伊勢三郎らの忠魂はどこへいったか。八月下旬の太陽は焼け付くようなその光を、さんさんと山上の草むらに投げかけていた。私はその草いきれの中に立って、しばし感慨にふけった。「夏草やつわものどもが夢のあと」——この句が実感とと

もに思い出された。

今年の夏は有意義な旅行をした。しかし今私の心に残るのは、あのきらびやかな金色堂でもなく、古めかしい中尊寺そのものでもなく、緑の田園を横切って、白々と空しく流れていたあの衣川の姿である。

秋

「秋きぬと目にはさやかに見えねども、風の音にぞ驚かれぬる」――そう、秋はそっとしのび寄って、不意に肩をたたく友に似ている。長い夏休みが終わり、何かとあわただしい一時期がすぎた頃のある日、街を歩いていて、頭の上で街路樹の葉がサラサラと鳴る音に、ふと心ひかれることがある。それは明るく、軽やかで、楽しい呟きとも、語りかけとも聞かれる。それを聞いたとき、私は「ああ、秋がきたのだな」と思う。

その頃、気が付いてみると、空はどこまでも青く、とほうもなく高いところに絹糸のような雲が浮いている。空気は澄み切って、さわやかで、一年中で一番よい季節であり、人々は、争うようにしてスポーツや行楽に出かける。

秋が進むと、すずかけやポプラなど街路樹が黄色くなり、風に吹かれて散る。散った葉が道路の片隅に吹き溜まりを作る。お茶目な少女が、わざとその吹き溜まりを蹴散らしてゆく。枯れ葉は少女の足元でカサカサと乾いた音を立てる。

さらに秋が深まると満山紅葉。散った紅葉が黒ずんだ古池の水面に浮かんで、友禅模様を織り成す。若い女性がそれを見て「まあ、きれい！」と、感にたえた声を発するのであるが、その美しさは実に見事だ。

夜は虫の声がしげくなる。「秋深くなりにけらしさきりぎりす、床のあたりに声きこゆなり」――。しかしその声は、残り少なとなった秋を惜しむ自然のエレジー（哀歌）としか聞かれない。

夜はまた月が美しい。「明月や池をめぐりて夜もすがら」と、美しい月に浮かれ出す人もあれば、「月見ればちぢに心もくだかれる、わが身一つの秋にはあらねども」と、センチメンタルな心境になる人もある。秋は人をさびしく、わびしく哀しい気持ちにもさせるが、それは美しい月のせいではなか

ろうか。

しかし、ともし火のもと、心静かに書をひもとくには、もっともよい季節である。気候もよい、精神も落ち着く。秋はまさに読書の好季節である。清涼の秋！スポーツに勉強に、この秋を有効に過ごしたいものだ。

花

花は見る人の目を楽しませるだけでなく、こころを清めてくれる。だから昔から花は、しきりに歌によまれ、詩につくられてきた。花を愛する心は、美しさを愛する心である。美しさを愛する心は、けがれのない心を愛することである。かつて暴力学校といわれた東京のある学校では、先生が花だんを作り、生徒に花をうえることを教えたところ、生徒の気風がガラリと変わって、今では模範校の一つに数えられているという。花を愛するものには悪人はない。美しい花をながめていると、心の中のわだかまりは消え、いつしか月のようにすんだ心境になる。玄関や床の間に生けられた一輪の花が、見る人の心をどんなになごやかにすることか。

人々が花を愛し、花を育て、日本中が花でうずまったら、どんなに美しいことだろう。そうなってこそ、はじめて平和国家日本が誕生するのである。

私の好きな花

私はつばきの花が好きです。つばきの花の、気どらないところがよいと思います。バラは着かざった都会婦人のようで親しめません。バラはだから花嫁の純白のドレスをかざるにはよいかも知れませんが、日焼けした村娘の髪をかざるのはつばきにかぎります。伊豆大島のアンコが紺がすりをきりりと着て、髪に赤いつばきの花をさしているポスターを見たときなど、いかにも美しいと思います。つばきは都会の花とはいえません。それは静かな、いなかの農家の庭にさくのにふさわしい花でありましょう。

ほかほかと温い小春びよりの日、眠くなるような水車のゴトン、ゴトンという音を聞きながら赤くさいたつばきの花を見ていると、ついうっとりと夢

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com